

音楽表現とのリンクを想定した音楽理論教育に関する試論

中村 知佳子

19世紀にパリ音楽院やブリュッセル王立音楽院で作曲の教授職にあったフランソワ＝ジョゼフ・フェティス (François-Joseph Fétis 1784-1871) は、自身の『音楽の諸原理に先行された段階的なソルフェージュ』の中で、「音楽理論」と「視唱 (音楽表現)」を段階的に学びリンクさせることの重要性を強調している。本論の目的は、このフェティスの提言を手掛かりに、教員 (特に幼稚園教諭) に必要な音楽表現力とのリンクを想定した音楽理論の教授法について考察することである。

我が国の教員養成課程の音楽理論においては、1) 教育・保育現場で必要な音楽理論と授業で扱う難解な音楽理論とのずれ、2) 音楽理論と音楽表現のリンクの困難さ、の2点が大きな問題となっている。本論では、「将来幼稚園教諭となる音楽初心者が、音楽表現とリンクできるよう、段階的に必要な音楽理論を学ぶ」という点に焦点を当て、諸音楽理論書の分析により問題点を抽出し、その問題を解消するための具体的な教材を提示したい。

広島文化学園大学学芸学部

Faculty of Liberal Arts and Sciences, Hiroshima Bunka Gakuen University

キーワード

音楽理論、ソルフェージュ、音楽表現、Fétis, François-Joseph

1. 序

本論の目的は、19世紀 (現) ベルギーに生きたフランソワ＝ジョゼフ・フェティス (François-Joseph Fétis 1784-1871) の提言を手掛かりに、教員 (特に、幼稚園教諭) に必要な音楽表現力とのリンクを想定した、音楽理論の教授法について考察することである。

この目的を遂げるため、本論では次の3つの段階を踏んで、考察を行う。つまり、1. 現行の音楽理論 (「楽典」とも呼ばれる。本論では、以下、「音楽理論」で統一する) 教育書を分析し、その教授内容と幼稚園教諭に必要な知

識の不一致点を整理する。2. 1. で整理した不一致点を改善するための開発教材を提示する。3. その教材の効果の確認のため、授業内に行った復習テストの結果を検討する。

本論の出発点となる問題の所在は次の2点にある。つまり、1) 幼稚園教員養成課程において取り扱われる音楽理論の難解さ、2) 同課程において取り扱われる音楽理論と音楽表現のリンクの困難さ、の2点である。この2点については、すでに先行研究が同様の問題意識をもとに解決の方策を論じている。1) については、河原田 (2015) が、『子どものうた 100』



(1982)の分析をもとに、幼稚園教諭・保育士に必要な音楽理論の知識を整理し、学修知識の選別を提案する。2)については、麓(2015)および横山(2017)が論じており、特に後者は、音楽理論により重きを置き、それを表現に繋げる方法として弾き歌い実践との関連付けの効果的な取り組みを提示している。

現代の音楽理論・音楽表現教育を巡る後者2)の問題は、2世紀も前にフェティスが問題意識をもち、メソッドを提案している。彼は自身の『音楽の諸原理に先行された段階的なソルフェージュ¹*Solfèges progressifs précédés de l'exposé des principes de musique*』(1827)の出版の動機を次のように述べている。

音楽を読むということ、つまり、難しく複雑な諸要素を読むということに対して、初心者の多くが嫌悪感を抱くのは、最初の初歩からすぐに、全く別々の物事それぞれへ注意を注ぐことに苦勞するからであろう、ということに気が付く。例えば、ソルフェージュの勉強において、もっとも初歩の生徒たちは、音符記号とその音価を読み、拍の分割を計算しつつ拍子を取り、正確に音を取りつつ歌うことを強いられるのである。(中略)それゆえ、それらを別々に教えることが自然である。

Il vit que les dégouts éprouvés par la plupart des commençants dans la lecture de la musique, lecture dont les éléments [sic.] sont difficiles et compliqués, provenaient de ce que l'attention se fatiguait à se partager dès les premiers pas sur des objets qui n'ont point d'analogie. Ainsi, dans l'étude du solfège, les élèves les moins

avances étaient obligés de reconnaître à la fois les signes et leur valeur, de battre la mesure, en faisant le calcul de la division des temps, et de chanter en cherchant la justesse des intonations. (. . .) il est donc raisonnable de les enseigner séparément (Fétis 1837: 107) .

つまり、ここでフェティスは、音楽を読むことや音楽を読むために必要な知識の習得に重きを置く「音楽理論」と、その理論に基づいて音楽を表現することに重きを置く「視唱(音楽表現)」を段階的に学びリンクさせることを提唱しているのである。

本論では、音楽理論を学び、それを音楽表現に繋げる教授方法について、先行研究を援用しつつ、先行研究で未だ明らかにされていない「将来幼稚園教諭となる音楽初心者が、音楽表現とリンクできるよう、段階的に必要な音楽理論を学ぶ」という点に焦点を当て、具体的な教材を提示したい。

2. 現行の音楽理論教育書

音楽理論書の出版は、枚挙にいとまがない。しかし、これらの理論書において、幼稚園教諭志望者が「音楽表現とリンクできるよう、段階的に必要な音楽理論を学ぶ」ことが想定された理論書は、調べた限りにおいて存在しないようである。

河原田(2015)によれば、幼保教育者にとって、①拍子、②和音、③調、に関して、次の知識が必要であるという。①に関しては、「単純拍子」をまずしっかり理解し、そのリズムを感じる事が出来るようにすることが重要」(ibid.: 134-135)であり、②に関しては、保育実践の場で活用できるコードネームの知識を付



けることが望ましいとする (ibid.: 135)。この時、②-1) 根音と完全5度音程の間に、長3度・短3度の第3音が存在して「長三和音(メイジャー・コード)」・「短三和音(マイナー・コード)」が成立しているということ、②-2) 伴奏付けを行う時に応用出来るよう、第3音が最低音に設定された場合の「第1転回」、第5音が最低音に設定された場合の「第2転回」を合わせて理解すること、の2点が、コード習得のための最低限必要な音楽理論の知識として挙げられている (ibid.: 135)。③に関しては、「長調についてまずは基礎的・基本的な音階の構造を学んで、その応用・発展として短調について理解する方法が良」く、「調号は \sharp ・ \flat の数が2つの調まで理解する」ことが重要である (ibid.: 133-134)。

この点を踏まえ、新たに譜表と音価という観点を追加して、初心者向けとされている音楽理論書A～Eの5冊と、「幼稚園教育者に必要な音楽理論知識」の不一致点について以下に整理する。

2-1. 譜表に関する不一致点

多くの理論書が、学修すべき事柄として最初に取り扱うのが譜表である。5冊中4冊までが、『子どもの歌』等に使用されず、保育現場で汎用性のないハ音記号を主たる学習内容のひとつとして取り扱っている。また、譜表に関する複雑な説明が多く記載され、「ト音記号」と「ヘ音記号」という核となる記号に関する説明が埋没してしまっている。

2-2. 音価に関する不一致点

次に、音価に関しては、いくつかの不一致点を挙げる事ができる。ひとつ目は、全音符と全休符の取り扱いである。理論書Aは、5つの理論書の中で一番易しい内容となっているが、

全音符の音価を4拍子のところで「4つ」と説明し、4つ分伸ばすことを強調して練習問題が作られている。しかし、ページが進んで3拍子の説明になると、突然この全音符の長さが「3つ」という説明にすりかわる。理論書B・Dには、そもそも音価の明確な説明がなく、理論書C・Eは「全音符を基準とした相対的な長さ」という観点からの説明がなされている。しかし、初心者にとって相対的な長さはイメージしにくく、理解に時間がかかると考えられる。ふたつ目は、譜表の問題と同様、複付点音符、複付点休符、32分音符、および32分休符のような、保育現場で使用する楽譜でほとんど見られない休符や音符の音価がその内容に入れ込まれていることである。この点については、5冊すべての理論書に共通する不一致点であった。

2-3. 拍子に関する不一致点

拍子に関しては、すべての理論書が単純拍子および複合拍子を扱い、さらに、5冊中4冊は混合拍子をその内容に含んでいた。

2-4. 音程や和音に関する不一致点

すべての理論書が、音程に関して、完全および増減1・4・5・8度、長短2・3・6・7度を取り扱っている。理論書B・C・D・Eには、重増・重減などの音程の取り扱いも見られた。また、和音に関しても、長3和音・短3和音・属7の和音・減7の和音などの「和音名」やその「音程構成」の理解が求められていた。

反対に、先行研究でも指摘されていたコードネームと和音の関係に関して取り扱った理論書は2冊あるが、複雑なコードネームの説明により、実践的な知識を付けることが難しい内容となっている。

2-5. 音階および調に関する不一致点



音階および調に関しても、他の不一致点と同様である。つまり、長音階、短音階、自然的短音階、旋律的短音階のように、細かい音階構造を、すべての調、つまり、 $\sharp \cdot \flat$ が0~7つついた長短調ごとに学ぶことが求められている。

3. 音楽理論の「段階的な学び」のための教材の提案

2. で整理した不一致点をもとに、小・幼・保の指導者養成課程における音楽理論の授業のための、以下の教材を開発した。2の番号と対応するよう、順に示してゆく。

なお、すべての授業を「Step」部と「Activity」部に分け、Stepで得た知識をActivityで実践するという流れを取ることで、理論的知識と音楽表現のリンクを目指した。

3-1. 譜表

Step部で、①五線と加線、②ト音譜表・ヘ音譜表・大譜表、③ト音記号とヘ音記号の書き方のみを説明した。そして、以下のActivity教材により、知識の定着をはかった(図1)。このとき、クラス29名中4名の音楽理論既習者のために、経験者プログラムも用意した。このト音・ヘ音の由来となる日本語音名については、次の回で詳しく説明した。

さらに、ト音譜表とヘ音譜表と対応する音名を、ハから2点ハまで読めるよう鍵盤との対応で学修した。

授業の最後には、『子どもの歌100』より「ちょうちょう」と「チューリップ」、つまり、誰もがリズムを知っている歌を取り上げ、階名唱を行った。このように、Activityとまとめの活動により、音楽理論の定着・活用と、その音楽表現への応用を目指した。

図1. 譜表に関する授業のActivity(中村作成)

Activity 1.

- ト音記号を10回、ヘ音記号を10回それぞれ書きましょう。
- 経験者は、未経験者に、なぜこれがト音記号・ヘ音記号と呼ばれるか、説明してください。両者ともその説明をプリントに書いてください。

3-2. 音価

音価に関しては、Step部で、音符と休符の長さに関して説明した。保育現場で汎用性のある全音休符、付点2分音休符、2分音休符、4分音休符、8分音休符のみの取り扱いとし、2-2. で述べた混乱が起きないように、全音符の長さを「全部」と表記した(図2)。

本時においてもActivityで知識の定着をはかり(図3)、授業の最後に、『子どもの歌100』より有名曲を取り上げ、階名唱を行った。

図2. 音価に関する授業のStep(中村作成)

Step 1. 音符の名前と長さ		
	名前	長さの意味
	4分音符	1つ(1拍)伸ばす
	2分音符	2つ(2拍)伸ばす
	付点2分音符	3つ(3拍)伸ばす
	全音符	全部伸ばす



図 3. 音価に関する授業の Activity (中村作成)

♪Activity3.

1. 今日習った音符と休符の長さ当てクイズを、ペアで5つずつ出し合ってください。音符・休符と長さをピンクシートに描いてください。

例えば、問「付点2分音符の長さは？」「3つ分」のように、

図 4. 和音に関する授業の Activity (中村作成)

♪Activity2.

1. CとCm, FとFm, GとGmの和音を1つずつ書きましょう。

2. 和音の音の横に、音と音の間の距離（長短3度・完全5度・長短7度）をそれぞれ書き込んでください。

2-3. 拍子

拍子に関しては、小節という言葉の意味と、拍子について説明した。この時、2/4 拍子、4/4 拍子、3/4 拍子のみを取り扱い、経験者に対しては個別に 6/8 拍子の構造を説明することとどめた。そして、2/4 拍子は、1 小節に 4 分音符が 2 つ (2 拍) 入る、という点を強調して、拍子の理解を促した。

2-4. 音程や和音

音程や和音に関しては、コードネーム習得時に必要となる長短 3 度と完全 5 度を中心に、完全・長短の音程を取り扱った。この時、減音程についてはその内容から除外し、「完全グループ」と「長短グループ」という 2 つのグループの音程の習得をはかった。さらに、長短 2 度と長短 7 度、長短 3 度と長短 6 度が表裏一体の関係にある²というメカニズムを説明し、暗記による知識習得を選択する者と、メカニズムの理解による知識習得を選択する者へ理解の手がかりを複数提示するようにした。

コードネームに関しては、基本となる C・F・G・Cm・Fm・Gm および G7 のみを取り扱い (図 4)、その和音構造を説明することで、他のコードにも活用できるようにした (3-補. C-learning 教材の項も参照のこと)。

また、転回概念も併せて教示した。なお、C・F・G および転回概念を学ぶ回と、Cm・Fm・Gm・G7 および和音の構造を学ぶ回は分け、段階的な学びを実現させた。

コードネームに関する 2 回の授業の Activity として、修得したコードネームが記された簡易な曲に、コードネームをもとに伴奏を付けるグループワークを行った。伴奏付けの成果は、授業の最後に発表会という形で披露させ、音楽理論と音楽表現のリンク付けを行った。この時、グループワークを行うことで、全くの初心者意見のみをいい、片手 2 小節のみを弾く、少し経験したものは楽譜を書き、左手を弾く、という役割分担をするなど、レベルに応じた知識の定着とリンク付けが行われた。

さらに、第 13 回の授業で、『子どもの歌 100』から、《たなばたさま》、《ふしぎなぼけつと》、《思い出のアルバム》の旋律部の写譜と、コードネームと既についている伴奏をもとに独自伴奏を付ける、という作業を全員に行わせ、器楽の授業で実際にそれを弾くという試みも行った。

2-5. 音階および調

音階および調に関しては、Step で、幼保指導者に必要とされる長音階 (長調) と、自然的



短音階（短調）を、 $\sharp \cdot \flat$ 2つまでの調で取り扱った。このとき、移動ドにはまだ触れず、「主音」の役割を説明し、各調の響きを耳で聴くことで、すべての調がド（トニック）の役割をする主音から始まり、ドレミファソラシド、の機能を果たしていることを体感させた。これは、Activityで、実際の幼稚園教諭、保育士の採用試験の出題問題（移調）を解くためのステップであり、実際の過去問題を移調する体験を行った。

3- 補・C-learning 教材

授業の補足として、学生がスマートフォンなどで手軽に行える学修補助教材を C-learning 教材として開発した。授業に対応するテーマで、1問1答入力形式とし、授業内容を確認する問題を各週5問ずつ出題した。特に、コードネームにおいては、あらかじめ音程の回で学修しておいた「根音+短3度+長3度」のマイナーコードの知識を用い、授業で学修した Cm・Fm・Gm をもとに、Dm の構成和音を予想させるなど、応用に繋げる問題も出題した。

さらに、「教材倉庫」に、学修した音程や音階、調、コードなどを実際に演奏した「音教材」を入れることで、手軽に理論を音として体感できる仕組みを併せて開発した。

4. まとめ

授業の第6回、第12回の Activity として、復習の時間を設けた。譜表・音価・拍子に関する復習を行った第6回では、20問の出題に対し、出席者24名中、22名が全問正解であった。残りの学生は、譜表に関してのみ正解が1名、譜表に関しての誤りがあった者が1名であった。さらに、第12回では、音程・和音・音階・調を中心に、譜表・音価・拍子の知識も併せて問う問題を15問出題した。出席者27名中、

調に関しての誤りがあった者が2名、和音（コードネーム）に関しての誤りがあった者が1名、調と音価に関しての誤りがあった者が1名であった。このうちの1名は、第6回目の復習で誤りのあった者と同一学生であった。

したがって、段階的かつ必要な知識のみに限定した音楽理論取得により、次の成果を得ることができたと考えられる。1. 譜表に関する最低限の知識のみを扱ったことで、譜表の意味や音部記号は96%が習得した。2. 全音休符を「全部」と記載したことで、4分の3拍子の全音休符4分の4拍子の全音休符の長さを明確に分けることができた。また、4分の2拍子や4分の3拍子など取り扱った拍子のなかに、どの音符がいくつ入るのか、という問いにも全員が答えることができている。3. 音程に関して、完全音程と長短音程のみを扱い、理解の方法を複数示したことで、完全・長短音程に関しては全員理解することができている。4. コードネームに関しても、96%の習得が見られた。5. 各授業を Step と Activity に分けることで、学んだ知識を表現にリンクさせることができた。さらにコードネームを使用し、楽譜を書き、伴奏付けを行ったり、それを実際に弾くことでも同様に音楽理論と音楽表現のリンクを実現できた。

本論では、幼稚園教諭に必要な知識のみに絞り、段階的な音楽理論の学びをもとに音楽表現とリンクさせるための教材開発を行った。上記結果により、本教材を使用して一定の成果を得ることができたと考えられる。

註

1. ソルフエージュとは、もともと17-18世紀にイタリアにおいて普及した歌唱練習曲（ソルフエッジョ）を指した。このソルフエッジョは歌唱教育体系として完成をみ



た後、19世紀のフランス・ベルギーにおいて、音楽表現に必要な技能を習得するための総合的な基礎教育（ソルフェージュ）として発達し、これが、こんにちのソルフェージュ教育の礎となった。フェティスの『音楽の諸原理に先行された段階的なソルフェージュ』はこのソルフェージュ教育の発達期に出版されたものである。こんにち、ソルフェージュ教育は、幼少期の音楽教育において主要な要素のひとつとして位置づけられている。それは、我が国の大学の幼稚園教員養成課程における授業でしばしば取りあげられるエミール・ジャック＝ダルクローズ（Émile Jaques-Dalcroze 1865-1950）、カール・オルフ（Carl Orff 1895-1982）、そしてコダーイ・ゾルターン（Kodály Zoltán 1882-1967）が子どもへのソルフェージュ教育を大きな教育実践のひとつに数えていることから窺える。そして、子どもに音楽表現教育を行う教師にとっても、すべての音楽表現に繋がる「音楽の読み書き」であるソルフェージュ能力の習得は必要不可欠な要素となる。

2. つまり、ミとファの間の音程は短2度であり、これを転回させたファとミの間の7度は、長になる、というメカニズムである。すべての短2度は長7度に、すべての長2度は短7度に、すべての長短3度は短長6度になる。

引用文献

- ・ Fétis, François-Joseph. s. d. *Solféges progressifs précédés de l'exposé des principes de musique*. M. Schlesinger: Paris
- ・ ————— 1837. “Fétis (François-Joseph),” in *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique*. Bruxelles: Meline: 4: 103-115.
- ・ 藤巻浩 2012 『聴くだけ楽典入門』ヤマハミュージックメディア: 東京。
- ・ 川辺真 2002 『わかりやすい楽典』音楽之友社: 東京。
- ・ 河原田潤 2015 「保育士・幼稚園教諭養成系における「音楽理論」の必要性和授業展開についての一考察」『常葉大学短期大学部紀要』46: 129-138。
- ・ 小林美実（監）；井戸和秀（編）1982 『子どもの歌 100』チャイルド本社: 東京。
- ・ 麓洋介 2013 「保育者養成校における楽典の指導内容および指導法についての一考察」『名古屋短期大学研究紀要』51: 237-247。
- ・ 桶谷弘美；熊谷新次郎；杉江正美；高橋悦枝 1994 『やさしく学べる音楽理論』音楽之友社: 東京。
- ・ オンキョウ・パブリッシュ（編）2015 『いちばんやさしい楽典入門』オンキョウ・パブリッシュ: 埼玉。
- ・ 佐々木邦雄 2014 『目からウロコの楽典』ヤマハミュージックメディア: 東京。
- ・ 横山真理 2017 「主体的な学びを促す『保育の表現技術』科目系列の音楽授業改善の要点—『楽典』に関する授業実践の省察を通して—」『東海学院大学研究年報』2: 161-171。



An essay for teaching methods of music theory in connection to musical practice

Nakamura, Chikako

Abstract

François-Joseph Fétis, who taught composition at the Paris Conservatoire and Conservatoire Royal of Brussels in the 19th century, wrote in his *Solféges progressifs précédés de l'exposé des principes de musique*, “in the study of solfège, beginning students are expected to read notation and understand its meaning, to beat time, and to sing, seeking to do so in tune [...] it is just as reasonable to teach these techniques separately” (Fétis 1837: 107).

The aim of this study is to examine teaching methods of music theory in connection to musical practice in a course for kindergarten teachers, using Fétis's suggestions. Today, many textbooks of music theory are used in university courses for training kindergarten and elementary school teachers. These textbooks contain two problems: 1) the music theory is more complex than needed for kindergarten and elementary school teachers and 2) the teaching of music theory is not linked with musical practice in elementary schools and in kindergartens.

In this paper we will examine these problems through a comparative analysis of existing textbooks of music theory and the content needed by elementary school teachers followed by recommended materials for teaching music to future elementary school teachers.